

2021年1月21日

### 博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 井上 和哉  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目（和文） Implicit Relational Assessment Procedure（IRAP）による変容のアジェンダの測定方法の確立  
論文題目（英文） Establishing a method for measuring a change agenda based on the Implicit Relational Assessment Procedure（IRAP）

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2020年12月7日・09:30-10:30  
実施場所 オンライン（Zoom）

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	大月 友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学
副査	立命館大学・教授	谷 晋二	博士（心身障害学）	筑波大学	応用行動分析学

論文審査委員会は、井上和哉氏による博士学位論文「Implicit Relational Assessment Procedure（IRAP）による変容のアジェンダの測定方法の確立」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 **コメント**：指摘したことは凡そ改善されている。IRAPの新しい使い方を検討したとても面白い研究である。

1.2 **質問**：IRAPの離脱が多い理由はどういうものか。

**回答**：ラベル刺激が長く、回答する際に参加者が混乱したと考えられる。

1.3 **質問**：機能分析シートでは何をしたのか。心理教育として、ACT（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）の心理的柔軟性モデルも含めているのか。

**回答**：日常での不快な場面や気分に対して、どういう行動をして、短期的、長期的な結果がどうなったかを振り返る。心理的柔軟性モデルは含めていない。

- 1.4 **質問**：研究2、3の結果をまとめて示し説明して欲しい。  
**回答**：研究2では、Preでアクセプタンスーネガティブ試行の得点が低い（アクセプタンスのルールが強い）人は、アクセプタンス介入後に冷水耐久時間が延びやすく、研究3では、アクセプタンスーポジティブ試行の得点が高い（アクセプタンスのルールが弱い）人は、アクセプタンスを実践しようとする、スピーチ課題後の反芻が増えた。
- 1.5 **質問**：研究3は、思考抑制の理論からも理解が可能とする理由を説明して欲しい。  
**回答**：アクセプタンスができずに反芻が高まったと考えたため、アクセプタンスの逆の行動である思考抑制に対する反応といった観点から説明できると考えた。
- 1.6 **質問**：変容のアジェンダIRAPにはどのような関係反応が含まれており、それをどう測定しているか。DAARRE (Differential arbitrarily applicable relational responding effects) モデルからの考察も期待したい。  
**回答**：時間と等位の関係が含まれている。DAARREモデルを用いた考察もしたい。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 潜在指標の方が「正確」というよりは、顕在指標と潜在指標で測定している次元が違う。IRAPは初期の関係反応を測定していると記述する。
  - 2.1.2 変容のアジェンダIRAPが、使用したラベル刺激とターゲット刺激に基づく、どういった関係反応を測定しているのかを理論的に考察する。
  - 2.1.3 研究1のACT学習者と非学習者のデータについて、変容のアジェンダIRAPが測定している内容の考察のために、DAARREモデルからの解釈を試みる。
  - 2.1.4 研究1における変容のアジェンダIRAPの再検査信頼性の値について、ICCの値だけではなく、信頼区間についても評価、記述する。
  - 2.1.5 研究1でのIRAP未達成者に関する考察として、実際に得られた実験データから、離脱の要因として考えられることを加筆する。
  - 2.1.6 研究3の手続きについて、機能分析シートでは、どのような手続きや教示を行ったのか、心理教育はどうしたのかなど、詳細な説明を書く。
  - 2.1.7 研究3の思考抑制の理論について、考察を加筆する。
  - 2.1.8 研究3について、主要な仮説の対象であった視線で結果が出なかったことに十分に言及した後で、有意な結果が認められた反芻についても考察する。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 潜在指標の方が正確であるという文言を修正し、IRAPが初期の関係反応を測定していることを記載した。
  - 2.2.2 第3章の考察において、変容のアジェンダIRAPが測定している関係反応を理論的に考察した。
  - 2.2.3 第3章の考察において、ACT学習者と非学習者のデータについて、DAARREモデルの観点から解釈を加筆した。

- 2.2.4 第3章の考察において、変容のアジェンダIRAPの再検査信頼性の信頼区間の広さについても考察を加筆した。
- 2.2.5 第3章(研究1)でのIRAP未達成者に関する考察として、実際に得られた実験データから離脱の要因として考えられることを加筆した。
- 2.2.6 第5章(研究3)の手続きや教示のより詳細な説明を加筆した。
- 2.2.7 第5章の考察において、思考抑制の理論の観点から解釈が可能と考えられる理由を加筆した。
- 2.2.8 第5章(研究3)の考察において、視線で仮説通りの結果が得られなかったことやその理由として考えられる事項について加筆した。

### 3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：顕在指標による変容のアジェンダの測定方法の限界点を克服するために、IRAPを用いた変容のアジェンダ指標を開発するという目的を明確に設定し、第3章で、変容のアジェンダIRAPの妥当性と信頼性を検討し、第4、5章で、変容のアジェンダIRAPがアクセプタンス介入による行動の変化を予測できるかを検討している。この目的は当該領域の測定指標の拡充につながるという点から、臨床心理学研究として妥当であると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論(研究計画・分析方法等)の明確性・妥当性：変容のアジェンダIRAPの予測的妥当性、弁別的妥当性、再検査信頼性、行動指標の予測の検討に用いられた研究・分析方法は先行研究においても用いられており、明確かつ妥当であると判断できる。なお、実験の手続きについては、「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し(研究1、2：2017-226、研究3：2018-108)、実験前に参加者に対して実験内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果として、IRAPという潜在指標を用いた変容のアジェンダの測定方法を確立し、それに実用可能な信頼性と妥当性があることが明確に示された。これらの知見は、先行研究と照らし合わせても、変容のアジェンダの測定に資する新たな知見として妥当であると判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
  - 3.4.1 国内外において、ACT介入の要になるとされながら、変容のアジェンダに焦点を当てた研究は乏しく、その測定方法も顕在指標によるものしか存在しなかった。本研究は、潜在指標による変容のアジェンダの測定方法を提案し、その信頼性と妥当性を検証した点で独創性を有する。
  - 3.4.2 変容のアジェンダに関する研究において、行動指標を使用した研究はほとんど存在しない。コールドプレッシャー課題や視線追尾装置を用いた本研究は、既存の枠組みを拡張した点に新規性を有する。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
  - 3.5.1 潜在指標による変容のアジェンダの測定方法を開発した本研究知見は、今後

の変容のアジェンダに関する基礎研究・臨床研究の幅を大きく拡大するものであるという点で学術的意義を有すると考えられる。

- 3.5.2 変容のアジェンダ IRAP を用いて、より効果的な ACT の介入技法の探索を実験室等で検討し、臨床実践の成績向上に資することができるという点で社会的意義を有すると考えられる。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
  - 3.6.1 本研究が、ACT の治療を円滑に進めるうえで重要なルールである変容のアジェンダの測定方法を拡充し、今後の実験的研究を進めることを可能にしたことは、心身の健康と生活の質の向上を目指す人間科学に貢献するものである。
  - 3.6.2 臨床心理学に行動分析学の基礎的な方法論を導入して、アクセプタンス行動が生起するために必要な関係反応を明らかにした本研究知見は、複眼的な人間理解に基づくアプローチが重要であることを示す好例であり、人間科学の発展に寄与するものである。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・ Inoue, K., Shima, T., Takahashi, M., Lee, S. K., Ohtsuki, T., & Kumano, H. : 2020 Reliability and Validity of the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) as a Measure of Change Agenda. *The Psychological Record*, 70, 499-513.
- ・ 井上和哉, 佐藤健二, 横光健吾, 嶋 大樹, 齋藤順一, 竹林由武, 熊野宏昭 : 2018 価値の意識化に創造的絶望を付加することがウィリングネスに与える影響—スピーチ場面に焦点を当てて—. *認知行動療法研究*, 44, 101-113.
- ・ 井上和哉, 熊野宏昭 : 2019 Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) を用いたACTのプロセス変数測定の研究動向. *早稲田大学臨床心理学研究*, 19, 191-196.

## 5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上